



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第18号(R5. 7. 11)

バレーボール部:宗像区大会 3 位、筑前大会進出!
バスケットボール部男子:宗像区大会 3 位、筑前大会進出!
体操部・兼田圭奈さん、筑前大会個人総合優勝、県大会進出!
(跳馬 1 位、段違平行棒 1 位、平均台 1 位、床 1 位全種目筑前大会優勝)

先週末も夏季中体連宗像区大会の熱戦が繰り広げられ、惜しくも進出を逃した部・個人もいくつかあります。上記の部活動が上位大会への進出を決めました。

また、種目によっては筑前地区大会も始まっており、体操部の兼田さんは見事に個人総合優勝に輝き、県大会進出を決定しています。

なお、野球部については、予定していた決勝戦が8日(土)9日(日)ともに雨天中止のため両校優勝となり、筑前大会に向けての順位は抽選となります。

授業研修の風景

先々週から始まった令和5年度の授業研修。先週は2本の道徳の授業が公開されました。河東中では道徳科にも力を入れています。7年生の道徳の研究授業の様子です。

池邊先生(道徳)

7年3組で行われた道徳科の公開授業。友情と信頼をテーマに「班での出来事」という題材で仲間との関わりを深めるために自分ができていることを考えました。

道徳科の教科書の内容を題材にして、友人関係の深まりについて考えました。全員が学習プリントに自分の考えを懸命に書く姿が印象的でした。グループでの交流を中心に授業が展開され、ジャムボードを使って意見を出し合いました。協議会では、道徳科と国語科の違い、デジタルとアナログの是非、タイマーの使用などが論議されました。



藤岡先生(道徳)

7年6組で行われた道徳科の公開授業。「いじめのない世界へ」というイラストの資料をもとに、いじめと遊びの違いを中心に考えました。



いじめを中心に悪口を書いたり人に紙くずを投げたり人をからかったりする架空の教室のイラストを使って考えました。それぞれの場面ごとに問題があるのかを各自で文章にまとめ、ジャムボードを使って班ごとに集約しました。7-6の生徒はとても活発に作業をしていました。最後は、いじめのない世界にするためにどうしたらいいのかを文章にまとめました。

ノーベル賞受賞者、ポール・ナースの中学生時代 ～ 夏の日にチョウの生体に感動し、世界的な生物学者に～

夏休みがもう目の前です。今年の夏休みは38日間もあります。今日紹介する話は、イギリスの中学1年生が13歳の時に体験したことが、のちにノーベル賞受賞の発見につながったという話です。

イギリスの細胞生物学者ポール・ナースは、細胞分裂や細胞周期の解明により、2001年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。彼は、研究者としては珍しく1冊の専門書も出していませんが、2年前に一般向けに『生命とは何か WHAT IS LIFE?』という本を出版しました。この本の内容を少し紹介します。

河東中生に知ってほしいことは一つです。中学生のポール少年が、なぜ生物学者を目指そうとしたか、そのきっかけとなった2つのことです。夏休みには、非日常的な経験や日頃何となく見落としていたことに改めて気づく時間があります。一日に何か一つでも新しい発見があるといいですね。そのためには、いつもより好奇心を旺盛にして、自分の感性を大切にしてください。

さて、中1のポール少年は、ある日ひらひらと飛んできたチョウの羽の血管や模様には衝撃を受けます。その生命的な精密さと人間である自分との共通点に非常に好奇心を覚えます。その気持ちが将来の生物学者への道を開きます。この本に書かれている所を引用しましょう。

『一羽のチョウがきっかけで、私は生物学をまじめに考えるようになった。

13歳のある日、庭に座っていたら、黄色いチョウがひらひらとへいをこえて飛んできた。そのチョウは向きを変え、ほんのちよつとのあいだ、羽ばたきをしながらその場にとどまった。羽の上に、精密に浮かび上がる血管や模様が見えた。次の瞬間、影がさすと、チョウはふたたび飛びたち、反対側のへの向こうへと消えていった。

その複雑で完璧に作られたチョウの姿を見て、私は思った。自分とは全く違うけれど、どこことなく似ている。私と同じように、チョウはまぎれもなく生きている。動くことも感じることも反応することもできて、「目的」に向かっているように思われた。実に不思議だ。

生きているっていったいどういうことなんだろう？ 生命って、なんなんだろう？

そして、チョウに出くわしてから間もなく、中学校の理科の授業で2つ目の大切な経験をします。発芽した玉ねぎの種子が配られ、その根を顕微鏡スライドの下に押しつぶして何でできているのかを観察する授業でした。理科の先生はこう言った。「生命の基本単位である細胞が見えるんだよ」—先生の言うとおりであった！箱状の細胞が整然と並んでいた。その小さな細胞たちの増殖と分裂が玉ねぎの根を土の下へと押し進め、成長してゆく植物に水と養分を供給している。とっても印象的だった。

生命の最小単位は細胞である。人間は1人当たりおよそ30億個の細胞からできている。細胞は不思議に満ちている。

細胞には、信じられないほど様々な形と大きさがある。細菌の細胞は、1mmの隙間に3000個も並んでいる。巨大な細胞もある。たとえば朝食のお皿にのっている卵。その黄身全体がたった1つの細胞なんて驚きだ。人間の背骨のつけねから、はるか足の爪先までの神経細胞はたった1つの細胞で長さが1mもある。

細胞できわめて重要な部分は「膜」だ。膜は細胞を周囲の環境から隔て、どこが「内側」でどこが「外側」かをはっきりさせている。すべての細胞は、内部状態と周りの世界の状態を検出して反応することができる。また、細胞は周囲とは密接に連絡を取り合いコミュニケーションをとっている。』

上にあげたように、ポール・ナースは、13歳の時に経験した2つのことをきっかけにノーベル賞学者となりました。河東中生のみなさんも、夏休みにこうした経験に出会い、人と出会うことで、将来につながることを願っています。大切なのは時間の豊富な夏休みに、ポール少年のように好奇心を持って感性豊かに生活することではないでしょうか。

